

衝立て式のプライバシー

ずっと以前から、歯の工合が悪くなっていた。かかりつけの先生のところへ行かなくてはと思いながら、何年もぐずぐずしていた。そのうち先生が亡くなってしまった。ぐずぐずが十年も続いた。途中で奥歯ががたがたになり勝手に抜けちゃった。別の歯にかぶせてあった金冠がはずれてしまった。いくらあのガリガリ音が嫌いだからといっていつまでも歯を放っておくわけにはいかない。止むを得ず歯科に通うことにした。

以前の歯科は札幌駅近くの古いビルの一室にあった。治療台が三台あって、床屋のように仰向けになっえ治療を受けるのだが、先生は一人。台に腰掛けて順番を待っていると、イヤでも隣の様子が見える。機械の腕が伸びて、その先端近くを先生が握り、イヤイヤ開けているような口の中で例の甲高い音を立てているのがよく観察できる。「次はお前がこうされる番だぞ」と覚悟を強いているようだった。自分の番が来れば、次の患者が私の治療の様子を横目でじっと見守るに違いないのだ。

今度通うことにしたのは自宅のすぐ近く。数年前に改装し、医師も交替したのだそうだ。白一色だった以前の歯科に比べ、新しい方は淡色ながら色使いが豊か。治療台は前と同じ三台だが、大きく違うのは、私をおびえさせた鋭そうなどがったヤスリの陳列やらペンチの類やらを乗せる台が、患者の正面におどろおどろしく存在せず、患者の目の届かぬ位置になっていること、そして私にとって一番の驚きは、隣の台との間に衝立てがあって、お隣りさんが受けている治療が全く見えない事だった。人間、パカアと大口をあけて、無防備に口の中を探られているサマなど、決して他人に見せたくはない。衝立てひとつあるだけで、人はとても安心するものだというを実はここで初めて気付いた。

そういえば、昔の公衆トイレの男性用には仕切りがなかった。今でもデパートや大病院や映画館でも仕切りのない所もある。

昔の風呂屋もそうだった。今は洗い場の蛇口ごとに小さな衝立てが付いている。衝立ての有無は日本人のプライバシー意識の変化と大いに関係があるのかもしれない。